

佐佐木朋子監修『佐新書簡』

斎藤佐知子

新村出宛佐佐木信綱書簡

佐新書簡とは、佐佐木信綱（1872～1963）と新村出（1876～1967）との間で交わされた書簡のことである。

佐佐木の佐と新村の新をとって、林大（1913～2004）が名付けた。本書は重山文庫に保管されている新村宛信綱書簡の封書、葉書574通を中心として編集されている。底本となったのは林大による翻字第一校本である。信綱門下生で国語学者である林は、重山文庫所蔵の信綱書簡の翻字、公開を願い、さらには近代文学館所蔵の信綱宛新村書簡との照合を念願していた。本書には新村書簡840通の目録が収録され合わせて1414通の書簡が明らかとなり、明治43年から昭和38年までのおよそ半世紀にわたる交流の跡を辿ることが可能になった。第二次校本の翻字修補にあたった北川英昭氏の努力があつて、本書と

して世に出ることになった。

書簡の性質上内容は多岐にわたり、学問的なこと、日常のこと様々であるが、新村書簡から例を見てみよう。

大正4年の封書に、万葉集の歌に言及した部分があるので引用する。「～巻五中のたしか反歌に（久方の天路は遠しなほほに家にかへりて業をしまさね）とあり候をく詩的価値のなき道歌めきたる一首ながら、日本人の長所短所をいひあらはしをる点に於て面白き作と覚え候がいかかに候や。（久方の天路は遠し）と現実的にあきらめたる所に、日本人の理想の高遠に欠ける点が見ゆるにあらざるや。哲学的思索なく、宗教的瞑想なく、絶大なる文学なく御高見同度候。」とある。山上憶良について二人の間で意見の交換があつたことが伺える。

信綱書簡について見てみよう。（ウノサノノコト）と小書した封書がある。昭和17年早春の日付である。一部を引用する。「～いづぞや京都駅にて御めにかかり候宇野君安南にまゐりをり、辞書其の他の事問合來

候まま（戦地にても研学の志ある人に候ま）御伺申上候事に候記もとめ候遣し候はばいかに喜ふへくと存候」

また、昭和18年8月16日付け封書には「～過般は宇野君につき忝く故人いかに喜可申存候 京都駅に來候は同君と養父（叔父）なる人に候」とある。

ここで言う宇野君とは、「心の花」会員で「鶯」同人であり、信綱、治綱の身近にあつて研鑽を積んだ宇野栄三（1916～1942）の事である。昭和15年召集、18年南方にて戦死した。

1葉目の書簡は、宇野栄三の戦地での様子の報告かたがたの礼状である。新村と宇野は面識があつたことがわかる。

2葉目は、新村から宇野の戦死に際し何らかの志が示されたものか、新村への礼状である。この2葉により信綱の宇野への慈愛の気持ちが伝わってくる。信綱には昭和16年、戦地なる宇野栄三君に、の詞書きの1首がある。「このあしたよきあしたなり鶯のこゑす、仏印の君が便りきぬ」。

本書あとがきに、書簡発見の経緯が詳しく記されているが、発見者細川光洋氏と、本書刊行までの佐佐木朋子氏の献身的な努